

# 未来志創

11/10 水

通心016(第656号)

合唱コンクールや校外学習の余韻に浸る余裕もなく、中教研学力調査や生徒会の後期への引き継ぎ、テキスト学習のスタートなど、慌ただしい日々が続いています。頑張りたいこと、やりたいこと、楽しみたいことがある中、「やらなければならないこと」が次から次へと押し寄せてくるような印象も受けます。そんな中でも、目の前の一つ一つのことを一生懸命やり抜こうとする気持ちが伝わってきて、日々成長を続ける皆さんが素敵だと思う毎日です。



## これってすごいことだと思いませんか？

「機会があったらちょっとギターを弾いてみてください。最初は上手く音が出ないんですよ。指先が柔らかいのでギターの弦を押さえようとしたら指の方が凹むんです。ところが、ギターの弦って結構強く張ってあるんです。だからちゃんと音を出すためには強く押さえないといけない。そうすると、触っていないつもりでもいろんなところが弦に触れて音がでなくなっちゃうんです」

…(中略)…

修一は言われるままに右手で弦を弾いてみたが、音が鳴ったのは一本分だけで残りの五本分は綺麗な音が出なかった。

「はは…思ったより難しいですね」

何度か握り直してみても、C(というコード)の音を鳴らしてみようとしたが、結局上手くいかなかった。修一は恥ずかしさを笑ってごまかしながら、ギターを藤上に返した。

「でも頑張ってる続けると、こうやって指先が硬くなる。で、指先が硬くなると、こうやって、触れるような感覚で弦を押さえることができるようになるんです」

そう言いながら、藤上は今修一に教えてくれたCのコードを押さえて、ジャカジャンと鋭い音を響かせた。

よほど強く押さえていたからか、修一の左手は指先がジンジンしている。藤上はすぐにギターをギターケースの中にしまった。

「ギターは指先が硬くなるから弾けるんですよ。これってすごいことだと思いませんか？」

「すごいこと……？」

「ええ。ずっと続けていると身体がギター仕様になるんですよ。でもこれ、ギターだけじゃないでしょ。人間の身体って、ひとつのことをずっと続けているとそれをやるのに適した仕様が変わっていくんですよ。これってすごくないですか」

「俺ね、人間の身体は、どんな仕様にも対応できるように、最初はあらゆるところが柔らかくできているんだと思うんですよ。それであることに興味を持って身体を使い始めて継続すると、それに必要な部位が成長したり、硬くなったりして、それをやるのに適した身体になってくれるんです。でもその間には必ずあるものがある」

「その間にあるもの……」

修一は赤くなり腫れた左手の指先を見た。

「そうです。『痛み』です。ジンジンするでしょ。痛みがあってようやく身体はそれをやるのにふさわしい仕様に仕上がる。柔らかいのは、何にでもなれる証で、痛みを経験して初めてスペシャリストになれる」

『運転者』(喜多川泰)

何かができるようになるまでには、何らかの「痛み」があります。「壁」と言い換えられるかもしれませんが、今自分が継続して頑張ろうとしていることも、きっと「痛み」を感じる瞬間が訪れます。でもそれは、スペシャリストに近づいている証なのかもしれませんね。